大友氏顕彰会だより
おおとも

第 39 号

理事長 牧 達夫
編　集 溝部幸祐

定例学習会（案内）

会員学習発表の場として「定例学習会」を、毎月（5月と1月は休み）第一土曜・午後1時30分から大友氏遺跡体験学習館（大分市元町）で開催していましたが、その学習館が大友館庭園西側に移転（9月30日オープン予定）して使用できなくなりました。

そこで9月より「ライフパル」で、毎月（5月と1月は休み）第一日曜（諸事情で変更あり）に定例学習会を開催することになりました。

会場　ライフパル　2階　会議室
住所　大分市府内町3-7-39
電話　097-573-3770

ライフパルとは、「暮らしの仲間」という意味で、大分市市民部市民協働推進課市民活動・消費生活センターの別名です。

開催日時
10月21日（日曜）13時30分～
11月　6日（火曜）13時30分～
12月　2日（日曜）13時30分～

事前の連絡は不要ですので、自由にご参加ください。

当面のイベント等

○第33回国民文化祭おおいた2018
第18回全国障害者芸術・文化祭

会期　10月6日～11月25日
内容　大分市内をはじめ大分県内の各地で様々なイベント等が開催。

○豊後FUNAIミュージカル宗麟の海

日時　①10月7日（日曜）14時～
②10月8日（月曜）14時～
会場　ホルトホール大分・大ホール
料金　前売券　1500円
当日券　2000円
内容　豊後が生んだ武将・大友宗麟の半生を描いた小説『宗麟の海』を原作としたミュージカル。

○直木賞作家「安部龍太郎」氏と大友氏を語る夕べ

日時　10月8日（月曜）18時30分～
会場　ホルトホール大分　3階　ホルトガーデン店
会費　6000円

○大型新人「赤神諒」氏を歓迎する夕べ

日時　10月12日（金曜）18時～
会場　トキハ会館　6階　「さくら」
会費　6000円

○「赤神諒」氏の講演会

日時　10月13日（土曜）13時～
会場　コンパルホール

○第六回「宗麟公まつり」

日時　①10月13日（土曜）10時～
②10月14日（日曜）10時～
内容　両日、大分駅府内中央口広場や若草公園にて、様々なイベント等が開催

（「赤神諒」氏も参加）

＊大友氏顕彰会も出店（大分駅前広場）

○大友宗麟公顕彰・全国カラオケフェスティバル

日時　１０月１４日（日曜）１１時～

会場　コンパルホール

会費　無料

内容　全国からカラオケ愛好者を募り、特にシルバー世代やシニア世代の活躍と交流の場を目的としたカラオケ大会。また、大友宗麟公や大分県の歴史等をテーマとしたスクリーン講演会を開催。

○第１４回「大野川合戦まつり」

日時　①１１月　９日（金曜）１５時～
②１１月１０日（土曜）１０時～
③１１月１１日（日曜）１０時～

会場　大野川大南大橋周辺河川敷・中戸次

内容　大友・四国連合軍が島津軍と戦った「戸次川の合戦」を甲冑劇や鉄砲隊の演武で再現。

○戦国の華　紹運（じょううん）」

日時　１１月１１日（日曜）１４時～

会場　ホルトホール大分・大ホール

料金　１５００円

内容　戦国時代、豊後も戦に明け暮れていた。大友宗麟の家臣・吉弘鑑理（あきまさ）の次男・弥七郎（のち高橋紹運（じょううん））は、その戦の中で青年へと成長。戦国の世に咲いた愛と義を貫いた男の物語。

《牧達夫理事長の活動予定》

【１０月】

△歴史と文化塾での講義（１０月１１日・南大分公民館）

△在京県人会９０周年記念大会（１０月２７日・東京都品川区）

△神奈川大分県人会長との懇話会（１０月２８日）

△神奈川・溝之口（由布院・溝口氏のルーツ）への訪問（１０月２９日）

△京都・史跡めぐり調査活動（１０月２９～３０日）

【１１月】

△歴史と文化塾での講義（１１月８日・南大分公民館）

△中世古典音楽でつづる竹田隠し切支丹物語（１１月１７日・竹田キリシタンホール：大友氏顕彰会協賛）

△歩くＤａｙ引率・説明（１１月２５日・南大分公民館主催：南蛮館その他を探訪）

＊各地の市議会議員との交流について、臼杵市議会議員（８月２８日に講演：いまなぜ大友宗麟か）に続き、本年度中に２～３の市議会との交流を目指す。

【大分合同新聞朝刊（Ｈ３０．８．２９）】

宗麟の精神 議員も学んで

顕彰会、臼杵市議会で第１弾講演

大友氏顕彰会（大分市、牧達夫理事長）の講演会「いま、なぜ『大友宗麟』か！」が28日、臼杵市議会であった。大友宗麟や大友氏の功績を広めようと、初めて市議を対象にしたゼミナールで講演。同会は今後、他の市議会などでも同様の活動を予定していく。

牧理事長が「臼杵と大友氏」に関し、宗麟が本拠を府内から臼杵に移した背景や城下町の発展、キリスト教への入信、市内に残る史跡などを紹介。若杉孝宏副理事長が大友氏の由来や一族の流れを説明した。

同会はＮＨＫ大河ドラマ化をはじめさまざまな活動をしており、牧理事長は「グローバルな視点で平和国家を造り上げようとした宗麟の精神を今こそ学ばないといけない」と話した。

講演する大友氏顕彰会の牧達夫理事長＝28日

大分合同新聞朝刊連載

宗麟の海

安部龍太郎・作　安芸　良・画

○あらすじ（四月十九日～五月二四日）

終章　王の船出　㊀

事件は二月の下旬に起こった。奥御殿から若い娘が蒼白になって駆け込んできた。ジュリアの助手をしているナオミだった。

「天殿さま、大変です。ジュリアさまが」

「ジュリアがどうした」

「奥方さまに折檻を受けておられます」

「なんだと」

宗麟は長廊下を走って億御殿に行った。ジュリアは全裸で枯れ山水の庭の木に縛られていた。十字架にでもかけられたように両手を広げ、雨に濡れた長い髪が乳房の前に垂れている。

弘子は節くれ立った竹の鞭を持ち、

「出ていけ、悪さをする狐は、この女子から今すぐ出ていけ」

そう叫びながら肩といわず腰といわず、力任せに叩いている。叩いた跡がみみず腫れになり、出血しているところもある。血は雨とともに糸を引いて流れていた。

「出ていけ。わらわの言うことが分らぬか」

弘子もずぶ濡れで、垂れ髪が前に垂れて顔にへばりついている。そんなことは気にもかけず、狐を叩き出そうと躍起になっているのだった。

座敷ではたすき掛けの侍女たち四人が、正座をして厳粛な顔で二人を見守っている。狐が抜けたかどうか見届けよと、弘子に命じられたのである。その横には義統も同じ姿勢で並んでいた。

「やめろ。やめないか」

宗麟は両手を広げ、ジュリアを庇って立ちはだかった。弘子は狐が出てきたと思い額をめがけて力任せに鞭をふるった。黒髪のすだれの奥で、いつもの三倍くらいに見開いた目を、憎しみに吊り上げている。

宗麟は素手で鞭を払い、弘子の腕をつかんで取り押さえようとした。ところが弘子は異常の力で反撃してくる。憑き物につかれているのは弘子の方だった。

「義統、何をしておる。母上を取り押さえぬか」

その声に義統ははっと我に返り、侍女たちとともに庭に飛び下りて弘子に組みついた。

「ギャアー」

弘子は天に向かって人間とも思えないような叫び声を上げ、そのまま真後ろに卒倒した。義統が後ろから抱きかかえていなければ、そのまま庭石に頭を打ちつけただろう。

「早く、早く奥へ連れて行け」

宗麟はジュリアの手足を縛った縄を切り羽織を脱いで体をおおった。

「天丈夫か、歩けるか」

「ええ、大丈夫です」

ジュリアは気丈に歩き出そうとしたが、腰からくずれ落ちそうになった。宗麟は、ジュリアを抱き上げて座敷に運んだ。

「早く着物を持て。傷の手当もしてやらねば」

矢継早にナオミに申し付け、濡れた体をふいて肌着を着せてやった。なぜだろう。女性の体という意識はまったくない。まるで十字架から下ろされたキリストの世話をしているようで、限りない愛おしさがこみ上げてきた。

「天丈夫か。痛くはないか」

綿にしみ込ませた薬で傷の消毒をしなが

ら、どうしてこんなことになったのだと、たずねた。

ジュリアは澄んだ目に涙を浮かべ、何も言おうとしなかった。こんな仕打ちを受けながらも、弘子を庇っているのだった。

「奥方さまは、大殿とジュリアさんの仲を疑っておられるのでございます」

宗麟に問い詰められて、ナオミが仕方なく答えた。ジュリアは宗麟に言い寄り、後添いになって大友家を乗っ取ろうとしている。親家とめぐみを結婚させたのは、その布石なのだ。弘子はそう疑い、日頃からジュリアを責め立てていたという。

「何と……、何と馬鹿げたことを」

宗麟は哀れさに突き動かされてジュリアを抱き締め、今こそ城を出るべきだと決断した。

さまざまな用事や気掛かりに後ろ髪を引かれ、今日まで延ばしてきたことが、こんな結果を招いたのである。今こそすべてを断ち切り信仰の道を歩き出さねばならぬ。

宗麟はジュリアを連れて表御殿へ行くと吉弘統幸に馬を引くように命じた。

「雨の中を、お出かけになるのですか」

「これはわしの戦(いくさ)だ。雨風を厭(いと)うておられようか」

やがて鞍をおいた十文字が引き出されてきた。インド副王から贈られたアラビア産の馬である。

宗麟はジュリアを抱きかかえて馬に乗り

「わしは今日限り城を出る。共に信仰の道を歩む者だけが、後につづくがよい」

そう言うなり、つづら折れの急な坂道を下りて行った。統幸ら数人の近習が、何が起こったのか分らないまま押っ取り刀で追いかけてくる。宗麟はそれを尻目に鐙(あぶみ)を蹴り皆を置き去りにして城下に駆け入った。

宗麟はひとまず教会に行こうとしたが、二人がこのまま教会に行ったなら、弘子は夫をジュリアと教会に取られたと思い、いっそう怒りと嫉妬をつのらせるだろう。兄の田原紹忍らと計り、キリスト教への弾圧を強めるに違いない。

（では、どこに行くか）

そう考えたがこれといって当てはない。

（六カ国の大守と言われたこのわしが…）

身を隠す場所さえなくて、行きくれている。そう思うと、自嘲(じちょう)の笑いが胸の底からこみ上げてきた。

宗麟は意を決して十文字を南に向かわせた。この先の五味浦に泉州屋(せんしゅうや)が店を構えている。茶人でもあり、何度か茶会に招かれたことがある。とりあえずそこに泊めてもらおうと思った。

泉州屋は海添川(かいぞえがわ)に面した所にあった。臼杵湾に入った船の積荷を、川舟に積み替えて店まで運ぶ。その荷を貯えておく蔵が、川沿いに五棟も並んでいた。

馬上のまま店先で来意を告げると、主人の嘉兵衛(かへえ)が飛び出してきた。

「大殿さま、こんな天気に、ようお越しいただきまして」

「いささか事情があって、宿を貸してもらいたい」

「結構でございます。どうぞご遠慮なく」

嘉兵衛は宗麟の顔が蒼白なのに気付くとずぶ濡れになるのも構わずジュリアを抱き下ろした。

重さから解放された宗麟の太股に、どっと血が流れ込んだ。そのために、頭の血が一気に下がり、気が遠くなって鞍の上に突っ伏した。

宗麟はそのまま気を失い、ジュリアと嘉兵衛が抱き止めてくれたお陰で、かろうじて落馬をまぬがれたのだった。

どれほど時間がたったのだろう。一瞬のようでもあり永遠のようにも感じられる。そうした昏睡(こんすい)をへて、宗麟は気を取り戻し

た。

部屋は八畳の茶室だった。宗麟が気に入っているこの部屋を、嘉兵衛は宿泊用に空けてくれたのである。

「天殿さま、お気付きになられましたか」

ジュリアはずっと付き添っていたようだった。

「わしはどれほど意識を失っていたのであろうな」

「二日間、眠っておられました。何かお持ちしましょうか」

「腹が減った。粥と梅干があれば有難い」

ジュリアは粥を作り、ほど良く冷ましてから持ってきた。それを梅干とともにすすると、梅干の酸味と塩気が粥の甘味を引き立て、滋養が体にしみ込んでいく。一杯の粥をこれほど有難いと思ったのは初めてだった。

「一炊の夢という故事があるが、まことだな」

人生は短く、栄枯盛衰も飯が炊き上がる間に見る夢のようなものだ。生死の境をさまよった宗麟は、自分の人生もまさにそうだと痛感していた。

「わしは家も城も国も捨てた。これからは信仰に生きるため、自ら望んでこの世の栄華を捨てたのだ」

宗麟はこの時から三非斎と名乗る。家に非ず、城に非ず、国に非ず。ただ信仰だけに生きる決意を示すためだった。

「だからジュリア。一つだけ頼みがある」

「何でしょうか」

「ずっと側にいて、信仰の道を共に歩んでくれ。迷い多きわしを助けてくれ」

宗麟はジュリアの手をそっと握った。

翌日、嘉兵衛が店を宗麟の新居として進呈すると言った。幸い蔵が空いているので家族や店の者はそこに住むというのである。

宗麟はその好意を受け容れたが、家族や重臣にはしばらく居場所を知らせなかった。弘子は激怒するだろうし、自分が城を捨てたと知ったなら家中が動揺すると思ったからだ。

このことについてフロイスは『日本史』に次のように記している。

「老いた国王は、もはやこれ以上、苦痛と嫌気に堪えられなくなり、そうした環境を退き、遠くから己れの身の振り方を定めようとして、臼杵城を出で、町の果てにある海辺の五味浦と称する場所に引き籠るために新しい住居を造らせた」

そうしてこの家から教会に通い、来るべき受洗の日にそなえて宣教師たちの説教を聞き、談話の席に加わって夜遅くまで勉強をつづけた。

そんな時、嫡男義統が日向の土持親成を討伐するために出兵することになった。松尾城（延岡市松山町）を居城とする親成は、薩摩の島津家と結んで大友家と敵対している。これを討つために三月十五日に出陣したのだった。

義統が家督を継いで、初めての出征である。大友家の当主としての威を示そうと、豊後・豊前・肥後から三万の兵を集めて出撃した。

これに対して土持親成は松尾城に立てこもり、島津勢の救援をあおいで抵抗しようとしたが、身方の国人衆は大友の大軍を見て次々と降伏し、手勢はわずか千五百ばかりとなった。

これではとても戦えない。親成は義兄に当たる佐伯惟教に仲介を頼み、四月十日に城を開け渡して降伏した。

まずは上々の首尾だが、後々の禍根となる失態が二つあった。

一つは、佐伯惟教の面目をつぶしたことだ。惟教は土持親成の助命と家の存続を条

件に降伏に応じさせたが、義統はこれを許さず親成を自害させた。田原紹忍らに反対され、前言をひるがえしたのである。

もう一つは、先陣の大将をつとめた大友親家が、日向の神社仏閣を手当たり次第に破却したことだ。そのために由緒ある神社や寺が焼き払われ、多くの貴重な遺産や記録が失われたのである。

宗麟は五味浦の新居で、この報告を受けた。義統の優柔不断と親家の独善が招いた結果である。だが自分が口を出すことではないと、信仰のみに目を向けていた。

六月になって弘子の使者がやって来た。

「こちらをご覧くだされませ」

差し出した書状には、六月十五日に弥栄神社の祇園会をおこなうので参列してほしいと記されていた。

「弘子はどうしておる」

「府内の館に泊り込みで、祭りの仕度をしておられます」

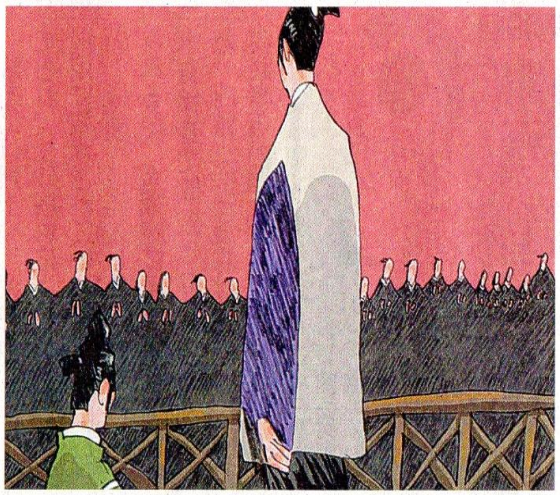
「ほう。熱心なことだな」

「今年はいろいろのご趣向をこらしておられます。是非ともご覧下されませ」

奈多八幡宮に生まれた弘子は、祇園会に特別の愛着を持っている。その場に招こうと仕度をし、趣向をこらしているのは、余程の思いがあってのことだろう。その気持を無碍にするのはあまりに気の毒だった。

六月十四日、宗麟は吉弘統幸らを従え、府内の大友館に入った。驚いたことに主殿から土塀にいたるまで、美しく作り変えられていた。寝殿造りにならった館は、主殿の両側に西の対、東の対と呼ばれる脇殿があり、池を中心とした広々とした庭に面している。

翌日、祇園祭りがおこなわれた。古国府の弥栄神社から出発した十二台の山鉾が、コンコンチキチキという鳴り物とともに府内を巡行し、二の大路を回って上河原の御旅所へ向かっていく。



大友家の桟敷は、二の大路に作ってあった。万寿寺の塀を背にして、十間（約十八メートル）もの幅がある。そこに義統と弘子が座り、左右に重臣たちが控えている。

祇園祭りの前には四人の桟敷奉行が任命され、山鉾が巡行する二の大路に築かれる桟敷の監督をする。家柄や身分によって、桟敷の幅や高さが厳しく定められていた。

宗麟は吉弘統幸らを従えて桟敷に上がった。すると重臣たちばかりでなく、道の向こうや左右の桟敷の者たちが全員立ち上がり、盛大な拍手で迎えた。

「父上、今日はありがとうございます」

義統も立ち上がり、弘子の隣に座るよう勧めた。

「盛大な祭りができて何よりだ。日向への出兵もご苦労だったな」

宗麟は土持氏征伐の労をねぎらった。

「かたじけのう、ございます。父上の名に恥じぬよう精一杯のことを」

義統は誉められた嬉しさに、体を硬くして礼を言った。

やがて一の膳が出た。山菜の煮付けや酢じめにした魚など、あっさりとした前菜である。酒もついていたが、宗麟は飲まなかった。

「殿、形だけでも受けて下され」

戸次道雪が盃を差し出した、すでに六六歳になる。意気だけは今も盛んだが、仁王のようだった体はひと回り小さくなっていた。

「立花城での働きは聞いておる。筑前の守りの要として、力をつくしてくれ」

宗麟は酒を口にする真似をして盃を返した。

「繰り言でござるが、あの頃は良うござったな」

「あの頃とは」

「殿を背負って、遠見山に登った頃でござる。南蛮船がやって来るというので」

「見に行ったことがあったな。そちが蜂を怖がって」

わしを背負ったまましゃがみ込んだと、宗麟はほがらかに笑った。

「吉岡どのも、吉弘伊予も、臼杵越中も行ってしまい申した。一人残されるのは辛いものでござる」

道雪が目を赤くして鼻をすすり上げた。

やがて鳴り物の音が聞こえ、先頭の山鉾がやってきた。木の車輪をつけた台の上に舞台を乗せ、稚児や囃子方が乗り、鉦(かね)を叩き笛を吹いて祭りの雰囲気を盛り上げていた。太綱に引かれた山鉾が二台目、三台目と目白押しにやって来る。

「見事なものだ。これなら都の祭りにも引けは取るまい」

宗麟は美しく華やかなものが好きである。よくぞここまでしてくれたと、弘子の尽力に感謝した。

「八坂神社から祭礼師を呼び、指導をしてもらいました。ほら、あれをご覧下されませ」

弘子が一番後ろからやって来る山鉾を指した。屋根の上に高さ一丈（約三メートル）の銀の十字架を掲げている。

「お前さまのために作らせたものでございます。皆は大殿鉾(おおとのほこ)と呼んでおります」

信仰は違っても、祭りは共に楽しむことができる。弘子はそのことをこんな形で示したのだった。

十二台の山鉾は二の大路から一の大路に入り、やがて大分川（祇園側）の河原に出て、上河原の御旅所に向かっていく。

宗麟らは万寿寺の東側の桟敷に移って、これを見物した。山鉾の屋根の軒下には、いつの間にか丸提灯が列をなして下げられていた。

「日暮れになったら、火を灯す趣向だな」

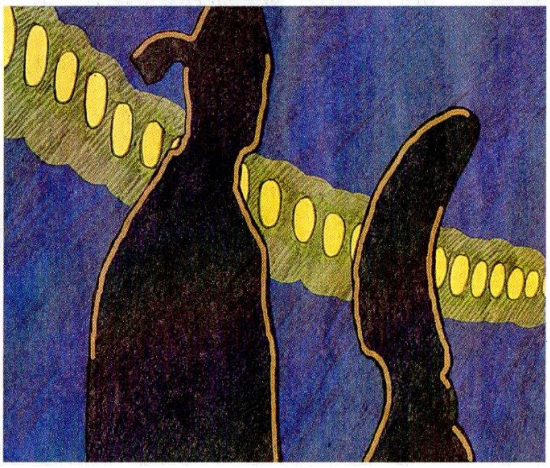
宗麟は子供の頃のようにわくわくしてきた。

御旅所の前に十二台の山鉾が勢揃いした頃、大分川の河口から六艘の関船がこぎ上がってきた。宗麟が育て上げた若林水軍である。いずれも甲板に竹の櫓を組み、丸提灯を三角錐(すい)の形に隙間なく飾り付けていた。

やがて御旅所の門前にかがり火が灯ると

「仕度がととのったようです。義統、あなたの出番ですよ」

弘子にうながされ、義統が空に向けて短銃の引金を引いた。空砲の乾いた音がとどろき、山鉾と関船の提灯にいっせいに火が灯った。手前から向こうに火が川を走るように提灯が灯されていく。



「素晴らしい。良いものを見せてくれた」
宗麟は感激のあまり涙を浮かべた。まさに今生の思い出である。弘子の配慮が胸にしみて有難かった。
「わたくしも悪いところは改めます。キリシタンの問題も、誰か才覚のある者に任せて穏便にはからうようにいたします」
だから城にもどって来てほしい。弘子は体を寄せて小声で頼んだ。
「気持は有難いが、それはできぬ」
「お前さまも日向攻めのことはお聞きになったでしょう。義統はまだ力不足ですし、親家は言語道断です。お前さまが後ろに控えていて下さらないと、重臣たちをまとめることはできません」
弘子がすがるように手を握ったが、宗麟はそっとふりほどいた。
「わしは三非斎となって信仰の道を極めたい。世界を捨ててでも、心が満たされる所を目指したいのだ」
「それでは家が滅びます。それでもいいのですか」
「たとえ城に戻ったとしても、わしはもう長くは生きられぬ。せめて最期ぐらいは、生きたいように生きさせてくれ」
「そうですか。分りました」

数日後、日田の飛丸がやって来た。飛丸は薩摩に行ったアルメイダとの連絡役をつとめていたが、アルメイダが臼杵に戻ってからは、薩摩のキリシタンたちと島津家の動向をさぐっていた。
「島津は日向に進攻する仕度ば始めました。先陣は島津家久どの、本陣は義久どのが指揮をとられます」
「なぜだ。島津とは長年好を通じてきた」
種子島は南蛮船の寄港地である。それゆえ宗麟も島津家との友好をはかってきたのだった。
「一つは土持の残党が島津に救いば求めたこと。もう一つは日向で神社仏閣が破却されたと聞いて、島津義久どのが激怒しておらるることです」
「そんなことで動く島津ではない。何かもっと大きな理由があるはずだ」
「おおせの通りでございます。確かなことは分りませんが、足利義昭公から命令があったようです」
「公方さまだと」
義昭公が備後の鞆の浦に御所ば構え、毛利輝元公を副将軍として上洛をめざしておらるることはご存じでしょう」
「ああ、聞いておる」

「ぼってん毛利は、東の織田、西の大友ば敵にして戦うことはできんと、上洛戦に踏み切ろうとせんとです」
「なるほど、それで島津に当家を攻めさせ西からの脅威を取り除こうとなされたか」
それなら島津も大義名分が立つ。この機会に一気に日向を攻め取ろうと決意したに違いなかった。
「して、軍勢はいかほどじゃ」
「先陣が五千、本隊が一万五千ばかりでございましょう」
「合わせて二万か」
「数は少なくとも、島津勢は三千の鉄砲ば装備しとります」
「鉄砲なら当家にもある。五千挺は下るまい」
「ところが島津は、ポルトガルから新型のマスケット銃ば買い入れ、それと同じ性能の鉄砲ば種子島で量産しております。その射程は二町（約二百十八メートル）もあるごたるけんで」
従来の鉄砲では対抗できない。島津が出陣に踏み切ったのも、新型鉄砲の装備を終えたからだという。
大友家が装備している鉄砲の射程は一町しかない。これでは倍の軍勢で迎え撃って

も、勝てるかどうか分らなかった。
（いや、勝ち目はあるまい）
島津家には義久・義弘・歳久・家久の四兄弟がいて、いずれも名将の誉れが高い。大友義統や親家が対抗できる相手ではなかった。
三非斎になった宗麟にとっては、もはや遠い対岸の話である。だが家が滅びると分っていながら、手をこまねいていることはできなかった。
宗麟は大徳寺の伝(つて)を頼って、織田信長に使者を送り、大友家と島津家の和議を仲介してくれるように頼んだ。信長と義昭のどちらに従うかと迫られれば、目端の利いた島津は義昭を見捨てると見込んだのである。
またカブラル神父らに頼んで、ポルトガルから島津に圧力をかけてもらうことにした。ポルトガルの意に反すれば、島津は南蛮貿易ができなくなり、弾薬入手の道を閉ざされるのだから、出陣を思い止まる公算は高かった。
だがこれはポルトガルやイエズス会、そして島津家を説得できる条件作りが必要である。
（そうだ。信仰の町を日向に作れば…）
つぼみが開くように、そんな考えが浮かんだ。攻め落としたばかりの松尾城（延岡市）を拠点とし、日向北部を宗麟が主宰する教会領とする。そして大友領からは独立し、イエズス会とポルトガル国王の指導のもとに領国経営を行なうのである。
こうすれば大友と島津の緩衝地帯になるし、必要とあらば耳川より南を島津領としても構わない。これなら三方円満に話をまとめられるのではないか。
そう思いつくなり、宗麟は教会を訪ねてカブラル神父らに相談することにした。
教会ではフロイスとアルメイダが出迎えた。
「カブラル神父は長崎からの使者と対面中でございます。少しお待ち下さい」
「今日は大事なことを相談するために来ました。薩摩のことです」
「戦争の話は聞きました。心配していたところです」
「それを避けるための提案があります。神父が来てから話しますので」
二人にも立ち会ってほしいと頼んだ。
「お待たせしました。国王さま、今日は体調もいいようですね」
「ジュリアが薬を処方してくれるので、ずいぶん楽になりました。そのお陰で島津との争いを避けるいい考えが浮かびました」
宗麟は日向の縣（延岡）に信仰の町を作り、日向北部を教会領にする案を打ち明けた。
「そこをバチカンにし、私が司祭となってローマ法王にならった政治を行ないます。これならバポルトガル国王モ喜んで下さるでしょうし、島津も手出しができないでしょう」
「素晴らしい。高いご見識には、いつもながら驚かされます」
カブラルは手放しで賛同したが、それには一つ条件があると言った。
「あのイザベル…。失礼、奥方さまのことです」
カブラルらは弘子を陰でイザベルと呼んでいる。キリスト教を弾圧したイスラエル王アシャーブの夫人と、異教徒で「大友家の女帝」となった弘子を重ね合わせてのことだ。
洗礼を受けるだけならまだしも、日本で司祭の役割を果たすからには、弘子を妻にしておくわけにはいかないというのである。
「それにジュリアのこともあります。国王さまは彼女と二人で暮らしておられますがこれは我々の信仰においては許されること

ではありません。この問題を解決するために、奥方さまと離婚してジュリアを妻に迎えるべきなのです」

「分りました。私は神父の洗礼子になるのですから何事もおおせの通りに致します」

宗麟は七月のお盆を機に丹生島城に登城し、義鎮と弘子、そして今や大友家最大の実力者になった田原紹忍と対面して計略を伝えた。

「わしは大友家を守るために、縣に信仰の町を築くことにした。すでに織田信長どのが島津との仲介を引き受けて下されたし、ポルトガル国王も了解して下さるはずだ。この策ならば、島津を確実に封じ込めることができる」

だから土持親成から奪った所領を、自分の隠居領とするよう求めた。

「分りました。そのように計らいましょう。ねえ、母上」

義統は弘子の同意を求めた。

「お待ち願おう。日向は伊東義祐(よしすけ)どのの所領でござる。すでに伊東どのには、島津を追って日向を奪い返すと約束しており申す」

田原紹忍が言い張った。

「今の島津と戦っては、当家に勝ち目はない」

宗麟は島津軍の装備を語り、合戦の無謀を説いた。

「大殿、お言葉でござるが……」

田原紹忍は反論しようとしたが、不満そうに顔をゆがめて口を閉ざした。

それから間もなく、耳川を境に日向を分け合うことで島津との和議が成立した。

（後にこれが破れ、大友家の大敗につながったのは、田原紹忍らが宗麟の意に背いて日向出兵を強行したからである）

七月二五日、宗麟はカブラル神父の導きによって洗礼を受けた。ザビエルから教えを受けて二七年目、長年の念願だった入信がようやく叶い、洗礼名も希望通りドン・フランシスコになった。

「お疲れでは、ありませんか」

ジュリアが体調を気遣った。

「まるで生まれ変ったようだ。この世は光り輝き、歓びに満ちている」

初めて心が満たされた嬉しさに、宗麟は躍り上がって神の御名を称えたくなった。頭の中では荘厳な讃美歌が鳴り響いていた。

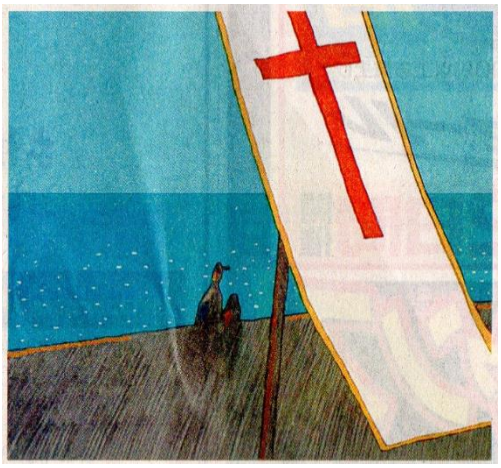
「讃美歌だ。新しい信仰の町はムジカと名付けよう」

半月後の八月十日、宗麟は弘子と正式に離婚し、ジュリアと結婚式を挙げた。長年の友であるアルメイダが立会人となった他は、一人の参列者もいなかった。

天正六年（一五七八）八月二二日、宗麟は若林水軍の関船に乗り、一千余の兵を従えて臼杵の港から出港した。

白地に赤い十字架を描き、金の縁取りをした旗を、帆柱に高々と掲げている。インド副王から贈られたものを、信仰の国ムジカの旗にしたのだった。

空は晴れわたり、涼やかな風が吹いている。海(うみ)はおだやかに凪(な)いで、新しい首途(かどで)を祝福しているようである。

宗麟はジュリアと並んで舳先(へさき)に立ち、このような生き方ができたことに感謝した。

（完）